『光り輝く島』スリランカ

札幌市立元町小学校　教諭　石　原　和　人

《スリランカ在籍について》
派遣期間　２００１年４月～２００４年３月
勤務先　　コロンボ日本人学校

１．スリランカ及びコロンボの概要

《スリランカの国土》

北緯５.５度～９.５度，東経79.４度～81.５度に位置する島国である。面積は約６.６万平方Ｋｍと，日本の東北地方，または中部地方とほぼ同じ広さ，北海道を一回り小さくしたぐらいの面積で，東西の最長部は２２５Ｋｍ，南北の最長部は４３６Ｋｍである。島の北半分には平野部が広がっているが，南半分は１０００～２０００ｍの山岳部と海岸の平野部からなっており，海岸線はほとんど砂浜である。

日本との時差は３時間で，日本の正午はコロンボの午前９時である。

《気候》

全島北緯１０度以南に入るが，比較的高い山地が中央部にあることと，１年を大きく２期に分けるモンスーン（　季節風　）のため，小さな島国と思えないほど地域的な気候条件の差が大きい。

東北部は乾燥帯になり，１年中雨が少ないため，古代より灌漑が盛んに行われてきた。中央部は２０００ｍ級の山地があり冷涼で，ホテルでは夜間暖炉が使われ，時には霜が降りることもある。紅茶の栽培が盛んなのはこの地域である。５月から１０月頃にかけて，南西からインド洋の湿気を含んで吹き付けるモンスーンはこの山地にぶつかって，島の南西部に大量の雨をもたらし，熱帯雨林気候を形成する。コロンボはこの熱帯雨林気候のエリアに入るので，年間通して気温，湿度ともに高い。日中，夜間を通して気温はほぼ２６～３３℃，湿度は８０％前後の間でしか変化しない。コロンボの気温は高いが，海に近いこともあり，日本の都市部のこもったような暑さとは違う。５月，１０月は雨が多く，梅雨に似た感じになる。

ヌワラエリヤでの茶摘み

《歴史》

古代・中世

＜紀元前５世紀＞　・インド西北部からアーリア人が渡来。先住民ウェッダー人を征服・統治。

植民地時代

＜１５０５年＞　・ポルトガル，西海岸部に拠点を築き，コッテ王国と提携しつつ勢力を拡大。（香料貿易の基地を設けることが目的）

＜１６５７年＞　・オランダがポルトガルに変わって支配権を得る。（香料貿易の利権をめぐって対立）

＜１８０２年＞　・イギリスの統治となり，インド帝国へ編入される。

＜１８１５年＞　・イギリスがキャンディー王国を滅ぼし，全島支配を確立する。（英国領インド帝国防衛のための基地として，軍事的価値があった。）

＜１８２７年＞　・コーヒープランテーションの労働者として南インドから多数のタミル人が移住した。

＜１８７０年＞　・紅茶のプランテーションが開かれる。

セイロンからスリランカへ

＜１９４８年＞　・イギリス連邦内の自治国（セイロン）として独立。

＜１９７２年＞　・自治領から完全独立・新憲法制定。
・国名をスリランカ共和国に改める。　「SRI＝輝く　LANKA＝島」

＜１９７８年＞　・憲法改正。
・国名をスリランカ民主社会主義共和国(Democratic Socialist Republic of Sri Lanka)に改める。

＜１９８５年＞　　・首都をコロンボから隣接するスリジャヤワルダナプラコッテに移転。

《民族・宗教・言語》

人口約１９００万人［２００３年］。国民は人種的には，外見的特徴では見分けられないが，言語・宗教の違いによって分類される。地方によっては，同じ民族が集まって村を作っていることも多いが，都市部では混住していた。

また，言語は，イギリスの植民地だったので国語は英語である。公用語としてシンハラ語という，この国独特の言語であるが，他に主としてタミル人が使うタミル語も公用語として指定されている，以上の３言語が併記されている場合が多かった。

・シンハラ	約７０％，	仏教徒（上座部仏教で日本とは異なる）
・タミル	約１８％，	ヒンドゥー教徒（植民地時代にインドから連れられて来た人々も含む）
・ムスリム	約　７％，	イスラム教徒（アラブ人の子孫も含む）
・バーガー	約　５％，	キリスト教徒（かつての宗主国オランダ人の子孫も含む）

《習慣・風俗》

あくせくせず，いかにも南国ののんびりした風土であるが，日本人とのペースの違いに初めは戸惑うことも多かった。また，日本人から見て特に感じるのは，宗教上の戒律が日常生活の中で生きていることである。イスラム教徒，ヒンドゥー教徒はもちろんのこと，仏教徒もいろいろな戒律の下に行動していることがわかった。

それぞれの宗教の特別な日は国民の祝日となっており，特に仏教では満月の日を聖日（ポーヤデイ）としているので，毎月祝日がある。ポーヤデイには，スーパーなどで肉類や酒類が販売されない。また，ホテルのレストランにおいても酒類は出されない。

また，２００４年は４月の１２日と１３日がこちらの新年にあたり，新年のお祝いをする。また，新年後の最初のポーヤデイをヴェサックポーヤデイと言って，日本のお盆のような行事を行う。ちなみにこちらの現地校の新学期開始は１月１日からである。

４大宗教が混在している結果，お酒も飲めたし,肉も牛，豚を含めて何でも売られているので，日本人が宗教上の制約で窮屈さを感じることはなかった。ただし，相手の信仰や習慣を尊重することは大切であると感じた。

《政治・経済》

大統領制である。１９９４年８月に総選挙があり，クマーラトゥンガ女史が大統領に就任し，長期政権が続いている。

経済成長は南アジア随一で景気は良いが,インフレで物価も上昇している。私が派遣されている間に，物価は１．５倍程度上がったと思われる。都市部に生活していると国民の生活も大変で，その成果わからないが，総選挙のたびに与党が負けるという状態が続いている。

スリ-ジャヤワルダナプラ-コッテにある国会議事堂

日本からの経済援助がたいへん多く，人口一人あたりに換算すると，日本は世界の国の中で最も多くスリランカに経済援助していることになるということである。

スリランカにおいては，北部・東部地域の分離独立を主張するタミル過激派（タミル・イーラム解放の虎：LTTE）とスリランカ政府との間で武力紛争が続けられてきており，これまで治安上の懸念材料となっていた。しかし，現政府は民族紛争解決を最重要課題として，2001年12月24日から，LTTEが呼びかけた一方的停戦に応じ，2002年2月23日午前0時には双方の間で公式停戦合意が発効した。現在までのところ，双方において概ね停戦が遵守されており，外国人及びスリランカ国民を巻き込んだ衝突・テロ事件等は発生していない。スリランカ政府とLTTEとの間で何回かにわたり和平交渉が開かれた。また，6月9，10日には「スリランカ復興開発に関する東京会議」が開催され日本を含む51ヶ国と22国際機関が参加し，スリランカにおける和平プロセスの促進に対する国際社会の力強い一致した決意が示

され，「スリランカ復興開発に関する東京宣言」が採択された（但し，LTTEは東京会議に不参加）。
２００４年４月の総選挙で現在の和平プロセスを進める首相派が負け，強硬派が勝ったので心配されたが，政府側とＬＴＴＥ側双方とも停戦を厳守しており，現在は平穏である。しかし，ＬＴＴＥ側の意見が分裂していて，ＬＴＴＥ側がどのように方針が変わっていくか不透明なところもあり，和平交渉は現在進行していない。

《コロンボ市の概要》

人口８０万。宝石，香辛料，紅茶の集散地として栄えたこの町は，随所に植民地時代の面影を残している。港を中心としたオフィス街，商業地域，住宅街とに分かれている。外国人も多く住んでおり，エキゾチックな雰囲気と近代的な都市景観が一つになっている。８５年に首都はスリジャヤワルダナプラコッテに移ったが，実質的な首都機能はほとんどコロンボにある。
また，スリランカはヨーロッパ人のリゾート観光地であり，その玄関口のコロンボもインド洋が目の前に広がり，観光客が訪れている。熱帯雨林気候のため緑は多く，一年中花が咲き，リス，イグアナ，マングースなどの小動物を住宅地でも見かける。上下水道・電気・電話等も整備され，生活で不便を感じることは少なかった。日常の生活用品については，最初の年にはなかなか手に入りずらかったものも，日に日に物の種類が増えていって，生活しやすくなっていった。しかし前述したが，物価の上昇がすごく，現地の人たちが生活していくには大変になってきたと思われた。
一方，都市への人口流入も激しく，それによる交通渋滞，騒音，大気汚染などの環境も問題となってきている。また，貧富の差が大きいので，高級住宅街とスラム街の落差に驚かされた。

２．コロンボ日本人学校について

《校舎・施設》

平成１３年度には，旧校舎として古い屋敷を借りて授業を行っていたが，スリランカ日本人会の長年の願いであった新校舎を平成１４年３月に完成させた。敷地面積は４，３５１㎡で，校舎延面積が１，７０３㎡である。普通教室９室をはじめ，図書室，音楽室などの５室の特別教室があり，小中学部合せて４０人前後の日本人学校としては，かなりゆとりのある広々とした校舎であった。体育館はないが，校舎の中央にプラザと呼んでいるホールがあり，休み時間の遊びや屋内での活動の場所になっていた。
グランドは，バレーコートを３面取れるほどの広さで，休み時間や体育の時間に使用していた。平成１６年度からは芝生を張り，より使いやすくなったようである。体育の授業のうち1時間は全校水泳の時間とし，車で１０分程の所のプールを借りて行っていた。

日本人学校の新校舎

築１００年の旧校舎

《独自の教育課程》

（1） 授業時数について

平成１４年度より新指導要領が施行され，授業時数を下記の表のように設定し，実践してきた。
小学部１年生から中学部３年生まで少人数の中，ほとんどの教科について単式授業で行い，実技教科については複式で行って教科担任制をとっていた。日本のように担任がすべての教科を担当していれば，時間割を毎週決めることによって授業を進めることができるが，教科担任制をとっているため小学部の時間割を固定して設定しなければならず，各教師の持ち時間の兼ね合いもあるので苦労した。
その中で，特に小学部の低学年では，海外教育施設ということを考え，国語の時数を増やして子どもたちに国語の力をつけさせることを考えた。算数についても各個人のレベルに合せた細かな指導をしていくという方針で，小学部各学年の授業をＴＴで指導してきた。各学年とも教師一人に対して児童が２，３人程度の状態で児童してきたために，より細かな指導ができたのではないだろうか。
中学部では週に１～２時間フォローアップの時間に当てた。これは，生徒自身が主要３教科の

中で自分の不得意な科目を選択し，勉強する時間である。中学部の選択の時間を振り替え，より個に応じた指導に努めた。生徒たちは自分にあった教科を選択し有効に活用していたようである。

資料　各学年の一週間の授業時数

	小1	2	3	4	5	6		中1	2	3
国語	9	9	7	7	5	5	国語	4	3	3
社会			2	2.5	3	3	社会	3	3	3
算数	3	4	4	4	4	4	数学	3	3	3
理科			2	2.5	3	3	理科	3	3	3
生活	2	2					英語	3	3	3
音楽	2	2	2	2	1.5	1.5	音楽	1	1	1
図工	2	2	2	2	1.5	1.5	美術	1	1	1
家庭					2	2	技家	1	1	1
体育	3	3	3	3	3	3	保体	3	3	3
道徳	1	1	1	1	1	1	道徳	1	1	1
特活	1	1	1	1	1	1	特活	1	1	1
総合			2	2	2	2	総合	2	2	2
ＥＣ	2	2	2	2	2	2	ＥＣ	2	2	2
							選択	1	1	1
					フォローアップ（英数国）			1	2	2
合計	２５	２６	２８	２９	２９	２９	合計	３０	３０	３０

小学部４年生の授業風景

週に一度の水泳授業

（２）水泳授業

熱帯の暑い気候のため１年間を通して週１回の水泳授業を行ってきた。１年目についてはそれぞれの泳力に分けて個人で活動する授業を多くしたが，２年目からは子どもたちの水泳授業に対する意欲をもっと伸ばしてあげようと，水中ポートボール（小学部）や水球（中学部）などのゲームを取り入れたり，小学部４年生から中学部までを力が均等になるようにチームに分けさせて，リレーに取り組んだりした。その結果，上学年が下学年の面倒をよくみたり，お互いに教えあったりすると言う姿が見えた。

現地スタッフによる
ＥＣ

（３）ＥＣの時間について

１週間に２時間，現地講師による英会話の時間を設定して実践されていた。小学部1年生から4年生の低学年の部と小学部5年生から中学部3年生までの上学年の部に分け，それぞれを英会話の力別に3つのコースに分けて行っていた。日本人学校に通っている子供たちは，学校のほかにも英語を習っている子供が多く，英会話力の高い子供が多数いた。その反面，転入したばかりで英語

がほとんど話せない子供もいたので，なかなか指導する上でも難しいと思われた。また，保護者からのECの授業に対して高い質の指導を願う要望も多かった。その中で現地採用の講師と保護者が願っている授業に格差があり，日本人の英語教師と打ち合わせをしながら授業を進めていった。

（4）現地の学校との交流会

コロンボ日本人学校では，年間２回ずつ現地の学校と交流会を行っている。前期に現地の学校を訪問し，後期は日本人学校に来ていただく形で進めてきた。私が派遣されている間に交流した学校は下記のとおりである。

	前　　期	後　　期
２００１年度	小学部　スタッフォード インターナショナル校 中学部　エリザベスモイヤー インターナショナル校	小学部　スタッフォード インターナショナル校 中学部　エリザベスモイヤー インターナショナル校
２００２年度	小学部　中学部 スタッフォード インターナショナル校	小学部　中学部 ヴィシャカＢＭＶ校
２００３年度	小学部　中学部 ヴィシャカＢＭＶ校	小学部　中学部 ルフナ大学

『食』のテーマで交流

シンハラ語を教えてもらいました

東京音頭を教えています

スリランカでは，日本からの援助が多いことや日本の企業が入っている関係もあって親日家が多い。また，日本語を教えているところもあり，日本に対しての関心は高い方である。

本校では，現地理解教育を進めていく中で現地の学校との交流会を重要視してきた。交流会では，前期に現地の学校を訪問して交流を深め，後期には日本の文化をスリランカの子供たちに紹介する活動を行ってきた。インター校へ訪問をした際には，授業に参加させていただいたり一緒に遊んだりして，交流を深めた。また，こちらの学校では，小学部（低・中・高学年の３つ）と中学部に分けてそれぞれ工夫して交流した。その中で習字を教えたりヨサコイの踊りを一緒に踊ったりした。

２，３年目のヴィシャカBMVは女子校で，日本語を勉強しているクラスがあった。担当していた教師が日本へ行ったことがあったこともあり交流をした。シンハラ語の文字を教えてもらったりスリランカの遊びを教えてもらったりした。また，ルフナ大学の学生とは，『食』というテーマで昼食のお弁当を交換したりうどんを打ったりして交流を深めた。

スリランカの学校では通常男子と女子が一緒に学習することがなく，男子校と女子校に分かれている。インター校については異なっていて，様々な国の子供たちが通っているのであるが，スリランカの経済的に恵まれている子女もたくさん（全校生徒の９０％程度）通っている。その関係でずっとインター校と交流をしていたと思われる。

しかし，こちらが考えているよりインター校では積極的ではなく，どうしてもというのだったら仕方がなくといった感じがあった。これは，年間の行事がかなり細かく決められていて，その中に日本人学校からの交流の依頼が後で来るので，調整が難しいせいもあった。

歓迎のキャンディアンダンス

また，インター校の生徒は数百人いるのであるが，日本人学校への興味がある子が多く，その中から６０人ほどを選抜して本校へ引率してくるのが大変だということである。そのことがあって，地元の女子校との交流を考えたのであるが、ここも１年間しかもたなかった。担当してくれた先生がとても一生懸命にやってくれたのであるが，同僚の先生たちから日本人と仲良くできていることにやきもちを焼かれ，足の引っ張り合いが始まってしまう。校内でうまく運営できなくなり交流が終わってしまった。このようにスリランカでは，ひとつの学校と交流を長続きさせるのが難しいのである。その中で今後も係りの先生が交流先を探すのがまた大変であろう。

（5）プラシナタイム

民族衣装のサリーについて

平成１４年度の指導要領の実施から取り入れられた総合的な学習の時間であるが，コロンボ日本人学校では，平成１１年度から実施していた。私が派遣された１３年度よりプラシナタイムとして週２時間で実施してきた。ちなみに『プラシナ』とは現地語であるシンハラ語で『課題』とか『問題』という意味である。

学校としては，現地理解の場としてプラシナタイムを生かしていこうと方向性を持って取り組んでいったが，個人としての取り組みが多いために様々なテーマについて調べることになり，現地理解とは異なるテーマで取り組むことになってしまう子どももいた。これは，その子どもたちが海外での生活が長い子どもやスリランカでの生活がとても長い子どもにその傾向が見られた。

プラシナタイムで大切にしてきたことは，下記のことについてである。

- 一人一人が意欲的に取り組むことができる課題をできるように支援する。
- 現地理解につながるようなテーマを決めるようにする。
- インターネット等の情報だけでまとめる調べ学習に陥らないようにする。
- 人との関わり（特に現地の人たち）を大切にして学習を進めていくようにする。
- 中間発表と奔発表の２回の発表会を設け，子どもたちの表現力を高めるように努める。
- 小学部３，４年生については学年でひとつのテーマで進めていく。（各学年が少人数のため）
- 最後にまとめたことについてはホームページに掲載するように各自がまとめる。

平成１５年度のプラシナタイムのテーマについて下記に紹介する。なお，まとめについてはコロンボ日本人学校のホームページを見ていただきたい。

スリランカカレーを味見して

木の実で作った手作りコマ

（URL　http://www.geocities.co.jp/NeverLand/2959/）

平成１５年度のプラシナタイム

『シンハラ語を知ろう・使おう』
『スリランカカレーについて』
『紅茶について』
『スリランカの宝石』
『スリランカの遊びについて』
『スリランカの民族衣装について』
『スリランカの占いについて』
『地球環境について』
『ＮＢＡで活躍する選手を考える』
『スリランカのバナナについて』

（6）宿泊学習　校外学習　修学旅行

コロンボ日本人学校では，小学部4年生以上が参加する2泊３日の『宿泊学習』，同じ時期に行わ

れる小学部1年生から３年生が参加する『校外学習』，そして小学部６年生と中学部２年生が参加する『修学旅行』が行われている。

①　宿泊学習

毎年６月の第２週あたりに実施されている。現地理解教育の一環としてスリランカ国内のことについて子どもたちと一緒に体験学習をしていくことをねらいとしている。国内では停戦が守られているとはいえ，安全上のことを考えると，どこでも行くことができる状態ではない。また，交通手段が自動車しか考えられない（鉄道もあるが安全性に疑問がある）国内移動を考えると，学校として子どもたちにできる限りの体験をさせてあげることも必要であろう。ただ問題点としては，道路事情が悪く移動時間が大変長いことで，片道６～８時間程度かかってしまう。近いところで適当な場所がないのも悩みであった。

私が派遣されている間の行き先と目的については次のようである。

２００１年度　　キャンディーにおけるＪＩＣＡのペラデニア大学歯科プロジェクト見学
　　ダンブッラ，シギリヤの世界遺産見学
２００２年度　　エッラにおいてのスリランカの自然・野生を体験
２００３年度　　ヌアラエリヤにおける茶摘み体験と自分だけの紅茶を作る体験学習と宝石を磨く体験学習

ペラデニア大学にて

野生の像とともに

みんなで茶摘み体験

②　校外学習

スリランカに住んでいると，安全上の問題で自分の足で町中を歩くとか子供だけで買い物をするという体験をすることが極めて少ない。これは，ドライバーの運転する車で移動しなければならないとか，日中暑いのでプールで泳ぐ以外は外で遊ばない（スリランカで生まれたこの中には自転車に乗れない子どももいる）ことが多いからである。また，メイドやドライバーを雇っている家庭では，サーバントに買い物を任せている家庭もあるからである。

ライオンって大きいね

そこで学校では，日本では当たり前にできる公園で遊ぶ体験や買い物体験，市内にある動物園への遠足的なもの，そして子どもだけで日本食を食べに行くといった体験学習を小学部の低学年に実施してきた。これは，高学年のみんなが宿泊学習へいっている日に午前日程で出かけて様々な体験をさせるのである。小学部の３年生が１，２年生の面倒をみて成長を遂げる行事でもある。今年度についてはキハダマグロの水揚げされているところの見学も入れているようである。

初めてのおつかい

③　修学旅行

毎年１１月の第２週くらいにモルディブ共和国へ修学旅行に行く。これは，スリランカ国内の安全事情，交通事情があまりよくないことや宿泊学習でいろいろなことへ行くこと，また，モルディブへの飛行時間が１時間３０分と国内の移動に比べると早いことや航空運賃や宿泊費が安く修学旅行費が約３６０００ルピー(１ルピー＝１２０円程度)だということがある。

モルディブは，たくさんの島からなる国であるが，島民が住んでいる住民島とホテルが建てられている観光島に分かれている。

修学旅行のねらいとして，モルディブの自然をしっかり体験することにおいていた。その中でシュノーケリングやダイビンの体験をして自然を満喫していた。

海の中を満喫

また，私が引率した１年目にはマーレ島でのＪＩＣＡの活動を見学にいった。マーレにはスポーツ，教育関係のほかに『タラセミヤ病』という血液の風土病の血液検査技師としてＪＯＣＶの活動をしている隊員の元をたずね，現状を学習した。

『タラセミヤ病』について，隊員の方が説明してくれたことをまとめると次のようになる。

平和な島を実感中です

- 血液の病気で，新しい血液を作る『骨髄』の働きが弱い病気であるということ。
- 生命を維持するためには輸血によって新しい血液を一生与え続けなければならないということ。
- 治すためには骨髄移植しかないが，手術の料金が高額のため，モルディブの人々にはよっぽど裕福な家庭以外は手術をうけるのは無理であるということ
- タラセミア病とは，モルディブという狭い島国が生んだ近親結婚（宗教にも関係している）によって作られた遺伝子の病気，貧血の一つであるということ
- モルディブはタラセミアキャリア（タラセミア遺伝子を一つ持っているのみで，その人自身は発症せず，無症状である）の数が世界で最も多い国であるということ。
- キャリア同士が結婚して子供を作ると，タラセミア病にかかる子供は２５％の確立で生まれて来るということ。

隊員の話を真剣に聞くみんな

- タラセミア病にかかった子供の平均寿命は２０才だということ。
- 予防するためには，自分がキャリアかどうかを知って結婚するしかないということ。
- 残念ながら，現在はマーレにしか検査機関がなく，他の島ではタラセミア病に対する意識がたいへん低いということ。
- マーレでもやっと最近結婚前に検査に訪れる人が出てきたという段階だということ。
- 現在マーレ（人口約７５０００人）では４００人のタラセミア病の子供がいる。

（７）運動会

一年に１回，日本人会との共催でコロンボ市内の大きなグランドで行われる。例年は１０月の第一日曜日に行われる。この時期は雨季にあたり，毎年運動会が始まる前にスコールが降ってグランドの水をスポンジで吸い取ったりしていた。それでも，コロンボ中の日本人が集まって一日を楽しんでいた。

日本人学校の子どもたちを紅白に分けて戦うのはもちろんであるが，日本人会の大人たちも青と黄色に分けて点数を争っていた。もちろん親睦が目当てではあるが，一年に一回の運動会ということでみんな必死で争っていた。

そんな中で毎年注目されるのが，『集団演技』である。私が派遣される前までは『応援合戦』として紅白それぞれが華美な衣装をまとって点数を争っていたらしいが，３年前からは点数をつけるのをやめ，昨年度からは『集団演技』として日本人学校の力をひとつに結集して日本人会の皆さんに演技を見てもらう演目へと変化させていった。

この種目は，中学部２年生が中心となって全校をリードしていかなければならない。中学部の子どもたちが小学部１年生の面倒まで見て，自分たちの満足いくものを作り出していくのは至難の業であり，中学部のみんなで悩み協力し合いながら作り上げていった。そこで全校の教師たちが支援していくのが大きな仕事のひとつであった。派遣２年目の教師が集団演技の担当となり子

どもたちへの指導の中心なるのが伝統であった。

日本人会の保護者の中には，その教師たちの力量が，演技の出来栄えに反映すると考えられている人がいて，演技と指導に対して厳しい審査をしていることもあり，私たちにもちょっと気合が入った部分もあった。しかし，基本的には中学部のみんなで作り上げていく部分が大きいので，活動に取り掛かる導入の部分で適切な支援をすると中学生たちは自分から積極的に動き始めたので小学校での指導とは少し異なると思われた。

力強い踊り！！

具体的に書くと，わたしが担当となった２００２年度では，『ヨサコイソーラン祭り』のビデオとＣＤを持ち込んで，『石狩流星会』の２００１年の踊りを見せて取り組むように持ち掛けた。そうすると，中学部の生徒数人で一晩で踊りを分析してしまい，小学生に教えられるところまでやってしまった。そうなると，私たちの役目は子どもたちが動きやすいように時間と場所を十分に確保してあげることであり，後はフォーメーションをどうしたらいいかということに対してアドバイスするだけであった。

みんなでポーズ！！

２００１年度には，金八先生のドラマの中で踊っていた「南中ヨサコイ」と「よっちょれ」に取り組んでいたので，子どもたちはとても意欲的であった。もう一つヨサコイに意欲的になったことに，高知県から同期に派遣されてきた先生が「鳴子」を百個以上持ってきたことも大きい。みんな本気になって，行事等で使用しているハッピを着て元気いっぱいに練習に取り組んでいた。

運動会当日に子どもたち一人一人の力を出し切り，自分たちの演技をやりきったときの子どもたちは，達成感いっぱいのいい顔をしていたと思う。

日本でも中学生の指導で小学生が演技をしていくような活動が組めるといいなと思う。小学生にも中学生にもいい体験ができると思われる。

３．コロンボでの生活

コロンボでの３年間の生活は，とても貴重な経験となった。私が『文集スリランカ』（一年に一回，年度の終わりに印刷される日本人学校の文集）に載せた文章と文部科学省への帰国報告書に書いた文章を紹介し，コロンボでの生活の一端をご紹介したい。

『光り輝く島』に来て　（２００１年の文集より）

コロンボ日本人学校に来てから，今までにできなかったことをいろいろ体験させていただきました。

最初にあげられるのが，人数が少なく家族的な雰囲気があるこの学校での生活です。私がこれまで経験してきたのは，すべて大規模校で，一学年に百名以上の児童がいる学校ばかりでした。人数の少ない学校できめ細かい指導をしてみたいと思っていましたので，とても新鮮な気持ちで子どもたちと接することができました。少人数で勉強することや運動することはもちろんですが，お昼のお弁当を六年生の五人と一緒におしゃべりをしながら食べるのがとても楽しくて貴重な時間だと思いました。

私にとって中学部の理科を担当させていただいたことも大きな経験のひとつです。もともと小学校の教師ですので，四月当初は中学生とどんな話しをしたらいいのかわからず，授業のある日は緊張の連続でした。新卒の教師と同じように毎日教材研究を繰り返して授業に臨んでいることが初心を思い出させてくれました。慣れてくると，逆に中学部の子どもたちと接するのがとても楽しみになってきました。

私は大学では地学を専攻していましたので，スリランカの地質について大変興味があります。ですから，宿泊学習で行ったシギリヤロックも大変興味深く見学させていただきました。ガイドの少年に聞いてみたところ，シギリヤロックは花崗岩でできているそうです。これからは，宝石を産出する地質や地形がどうなっているのか様々な所へ行って見学したり調べたりしたいと思っています。

修学旅行も印象に残った行事の一つです。海外への修学旅行というのも初めてだったこともあるのですが，モルディブの海と夜空の星のすばらしさ（水平線近くでもはっきり見えました）に感激しました。

しかし，出発前日に帰りの便が飛ばなくなり，二泊三日の旅行が三泊四日になったのには大変驚かされました。おまけに，帰りの便がモルディブの人たちによるメッカ巡礼の団体客とダブルブッキングとなり，半日ホテルで待たされたというハプニングまでありました。ハプニング続きの旅行でしたが，そのおかげで絶対に忘れることのできない旅行にもなりました。子どもたちも同じではないでしょうか。

生活面での体験として,やっぱり忘れることのできないのが，パワーカット（計画停電）でしょう。私の家では，最初ロウソクを灯して家族で一緒に集まっておしゃべりをして過ごしました。それから，エマージェンシーライト購入して，その時間は読書をしていたこともありました。さすがに四時間を越える停電になったときに我慢できず，自家発電機を買いました。この体験で,本当に電気のありがたさ,電気のある生活の便利さ,電気が私たちに与えてくれていた安らぎを痛感させられました。

卒業生と一緒に

最後にあげておきたいのが，雪のないクリスマスと正月を経験したということです。私が住んでいた北海道では，夏が短く，半年は雪の中で過ごしていましたので，季節のない感覚が何か不思議な感じがします。月日が経つのが早く感じられるような，時がそのままとまっているような不思議な感覚です。

これからもいろいろなことを経験していくと思いますが，コロンボでの生活を楽しみながら，日本人学校の子どもたちと一緒にがんばっていきたいと思っています。これからも皆さんよろしくお願いします。

一年を過ごして（２００２年の文集より）

旧校舎から新校舎へ、三月三十一日に引越してきて、もう一年が過ぎようとしています。昨年も感じたことですが、本当に一年が経つのが早いと感じています。

旧校舎では、パワーカットの時には真っ暗になったり、雨が降ると雨漏りがひどかったりといろいろ不便なところがありました。校舎自体が九十九年もたっていたのですから仕方がないところでしょう。しかし、その旧校舎も跡形もなく取り壊され、何かさびしい思いをしているのは、私だけではないと思います。

新校舎での生活は、旧校舎に比べると快適この上ないものです。新しくてきれいな校舎、明るい校内、休み時間に子供たちの歓声がこだまするプラザ、大きな黒板を備え付けた各教室、そして、パワーカットになっても自動的に作動するジェネレーター、挙げるときりがありませんが、子供たちの学習するすばらしい環境が整いました。私たち教師も施設に似合った教材を考え出し、いろいろなものに取り組んできました。特に、生活科やプラシナタイムなどで、調理してみんなで食べるということが、新校舎になってから普通に活動として取り入れられるようになりました。

校舎だけではなく、私たちを取り囲む情勢も昨年度とは違い、安定した環境になってきたのではないでしょうか。昨年の文集スリランカにも書きましたが、最高八時間あった定期的なパワーカットは、今年の豊富な雨量で（降りすぎという話もありましたが）、四月からずっと経験していません。それだけでも、私たちの生活の中のストレスの一部が解消されました。また、政府とＬＴＴＥとの平和交渉が、何とか前進を見せて、昨年までのような爆弾テロもなくなりました（まだまだ安心はできませんけどね）。この問題に関しては、われわれ日本の役割が大きくなってくるのではないでしょうか。十二月現在、市内はきれいな電飾に包まれて、平穏な雰囲気でクリスマスを迎えようとしています。このまま宗教的な対立も泣く、平和な日々が続けばいいなと思っています。

そんな平和な雰囲気の中、今年度、日本とスリランカの国交五十周年の年を迎えました。記念のパーティや和太鼓などの公演等の記念行事を通して、日本とスリランカとの友好関係もよりいっそう深いものになったのではないでしょうか。これらの意味からもスリランカにとって、とても重要な一年だったと言えるのではないかと思っています。

そして、私たちの学校でも日本の新指導要領が施行され、大きく教育内容が変わりました。子供たちの「生きる力の育成」という大きな目標に向かって、教育活動が行われていきます。その中のキーワードの一つとして、言われていることに「共生」という言葉があります。自分ひとりで生きていくのではなく、周りの人たちと共に生きていく力を育てていく必要があるということです。まさに、ここスリランカにぴったりくる言葉ではないかと思っています。いろいろな宗教の対立がある中での共生、シンハラとタミールとの共生、日本人とスリランカ人との共生。なかなか難しいことですが、子供たちが今後国際社会で生きていくために、このスリランカをいろいろな方面から体験していくことが、子供たちに「生きる力」が育っていくのではないかなと一層感じた一年でした。

かわいい小学部２年生

光　陰　矢　如（２００３年の文集より）

『光陰矢如』（こういんやのごとし）月日がたつのは早いという意味ですが、今の私の心境にぴったりの言葉です。三年前、憧れの日本人学校の教諭として、コロンボに派遣されてきました。当時は、この学校で子供たちと一緒にいろいろな学習や体験をしていくことができるという期待でいっぱいでした。それがあっという間の三年間で、もう帰国しなければならないのかという心境です。

札幌では経験できないような少人数制での授業や教師生活初めての中学生との授業は、特に心に残っています。少人数制の授業では、大人数のクラスと違い、他の友達の意見を聞いて、いろいろなことに気づくという機会が少なく、学び合うことが少ないというのが難点です。しかし、それ以上に一人一人の個性に合った学習を組むことができ、より細かい指導をすることができたと思います（一対一の授業や二対二の授業になったこともあり、家庭教師のような状態になってしまったこともありました）。帰国後は大人数のクラスが待っています。難しいことですが、ここでも一人一人の子供を生かす授業を通して細かな指導や支援をしていかなければならないことを改めて感じました。

また、本校では小学生から中学生までが一緒になって活動する場面がよくありますが、みんな仲がよくて高学年が低学年の面倒をよくみています。また、低学年のみんなも高学年の言うことをよくきいてチームワークがすばらしいと思います。これが本校の良い点の一つだと思う人は私だけではないと思います。こんな光景がずっと続いてほしいと思っています。

私が中学生との授業を通して感じたことは、改めて中学校の学習内容を勉強することができたことで、小学校の指導内容の重要さを改めて勉強させてもらいました。また、中学生の考え方を理解していったこと自体が大変勉強になりました。そんなことは当たり前だといわれる方が多いと思いますが、札幌では、小学校を卒業させると中学校との交流が少ししかなく、子供たちの成長の様子を知らない先生も多い（もちろん私も含めてですが）のが現状だと思います。そんな環境にいたので、中学生のことを理解することの重要さを改めて感じました。そういう意味でも、せめて中学校の教師と小学校の教師の交流を盛んにして卒業生のことを見守っていくことが大切なのではないかと思いました。

コロンボ日本人学校へ来て、最も心に残っているのが、いろいろな人との出会いと別れです。ここの学校で出会って別れていった子供たちの顔が走馬灯のように思い浮かびます。紹介式で出会い、お別れ式でこの学校を卒業していくわけですが、どの式も印象深いものでした。私は、何回もお別れ式の司会をしてきましたが、いつも心が締め付けられる思いで言葉に詰まりそうになったこともしばしばありました。日本人学校特有の別れですが、何回経験してもつらいものでした。また、たくさんの保護者の方々にお世話になり、いろいろなことを教えていただいてすばらしいスリランカの生活をさせていただきました。

離任式（半分が入れ替る）

いろいろな思い出を胸に札幌に帰ります。札幌でもスリランカのことを忘れずに子供たちと教師生活を続けます。お世話になった皆さん、本当に三年間ありがとうございました。

離任の挨拶

文部科学省帰国報告書「派遣教員としての生活について」より

始めの１年目については，スリランカの生活に慣れるので精一杯であったというのが本音の部分である。生活を始めてすぐの５月初旬に外出禁止令が出たり６月から１０ヶ月に渡ってパワーカットがあったりした。スリランカは水力発電に５０％の発電を依存しているが，この年は記録的な旱魃に襲われ，６月の１時間３０分の停電から始まり，一番ひどかったときには４時間の停電が一日に２回と８時間停電までになってしまった。幸い次の年の雨季にはしっかり雨が降ったのでその後はなかったが，電気が当たり前にある日本にすんでいた私にとっては，電気のありがたさが身にしみて感じる事ができた。

また，普段の生活においては，食べ物を始めとして日常の様々なものまで周りの店で買い揃える事ができるようになってきた。『発展途上国』の名の通り日に日に売られている物が増えていく事を実感できた。しかし，物価の上昇はとてもひどく，売られている値段が派遣中に３０％から５０％近く上がったのではないだろうか。物価は日本に比べるとかなり安いと感じている我々でさえ物の値上がりに脅威を覚えたのであるから，月収が平均６０００ルピーといわれている現地の人たちにとっては大変な事ではないかと思われた。

もう一つ生活の中で大変だったのが，現地の人をメイドやドライバーとして雇わなければならない事であった。もちろんメイドとドライバーには大変お世話になり，ありがたい存在であった。しかし，メイドは一日中妻と一緒に生活せねばならず，妻にとってはストレスが相当たまったようである。妻帯者にとっては，メイドは，文部科学省が薦めているように雇わなくてもいい現状であれば，雇わないほうが配偶者のストレスはたまらないと思われる。ドライバーについても同様に難しかった。ドライバーは，現地の交通事情を考えるとどうしても雇わなければならなかった。その中で，お金にルーズな人がいたりプライドが高くて雇いにくかったりと人間関係の難しさを実感した。

２年目からは，生活に慣れた事もあってブリティシュ・カウンシィルで英語を学び始めた。ここでは，現地の人たちといっしょに学習する事ができ，現地理解をするに当たってとても有意義であった。その現地教育事情については別のレポートにて提出した。派遣されていた残り２年間，英語に触れる事ができ今後の英語活動を進めるに当たって生かしていきたいと考えている。

日本人会の行事には極力出るように心がけていた。パーティはもちろんであるがスポーツの大会や旅行にも親睦を図るために参加した。親睦を図るだけではなく，現地の様々な情報も得る事ができてよかったと思っている。

私が派遣されている２年目の平成１４年はスリランカと日本の国交樹立５０周年ということで，様々な行事に参加する事ができた。そういう時期に日本人学校にいる事ができたのはとても光栄に感じている。その中で，日本人学校のフェスティバルに現地の大学の学生が参加してくれたのがとても印象的であった。

また，スリランカで経験した事全てがとてもよかったと実感している。狭い日本人会での付き合い，日本人学校の教師同士の家族ぐるみで付き合い等大変だなと思った事はあるが，全てが今後の教師生活の肥やしになると思っている。

現在高１の娘と中１の息子は，多感な時期に落ち着いて日本人学校で学習できたことやスリランカという文化の違う土地で３年間過ごせたことは大変プラスになったと思っている。今後子供たちの進路を考えると様々な選択肢が広がったのではないだろうか。

本当に貴重な三年間であった。今後，経験したことをさまざまな形で北海道の教育のためにがんばっていきたいと考えている。

４．派遣教員の現地教育事情等に関する調査報告

平成１５年度より現地教育事情について，実際に現地の学校へ行って調査したことをＡ４用紙２枚にまとめる報告が始まった。私は自分が通っていた英会話の学校の生徒に取材し，次のようにまとめた。今後の参考になればと思い，ここに掲載させていただいた。

British Councilにて

調査内容

○　British Councilの学習システムがどのようになっているか。
○　通っている生徒に関してアンケートをとり，その実態をまとめる。
・　スリランカの子供たちにとって British Council で英会話を学習することへの意識とどのような目的や意味があるのか。
ビジネスコースに通う会社員のBritish Councilで学習意識等。

・はじめに

British Council校は，日本にも４校（東京，大阪，京都，名古屋）あるイギリスに本部のある英会話の学校である。教師たちは、全て母国語を英語とする教師ばかりである。私は，派遣されている間の後半２年間にBritish Council校で，現地の大人や子供たちと一緒に英語の研修する機会に恵まれた。そこで今回，British Council校の何人かの教師の皆さんにご協力のもとに，約８０名の生徒へアンケートをとったり，直接インタビューしたりして，本調査報告にまとめた。

１，　British Council の授業について

British Council校は，１６歳以上のGeneral Englishコースと４歳以上１６歳未満のYoung Learnersコースに大きく分けられている。また，大人のためのビジネスコースや現地語としてシンハラ語も教えている。１ターム５０時間（2時間30分×20回）とし，年間4タームとし，１クラス２０名以内で学習が進められている。また，１日に4度の授業が設定（8:00～10:30, 11:00~13:30, 14:45~17:15, 17:30~20:00）され，この中から授業時間を選ぶことができる。

・Young Learnersコース

入学前に試験をして能力別にクラス分けをし，学習している。現地の子供たちはもちろんであるが，スリランカに在住している日本人を含む外国人も多数通っている。午前中と午後に授業が行われている。コロンボ日本人学校では，約三分の一に当たる１４人が通い，学習しているが（2004年2月現在），本校の子供たちにとって，現地の子供たちと接する機会が少ない中，現地の友達を作るいい機会の一つだと考えられる。１回のタームが終るごとに各親たちへの個人面談があり，子供の学習の様子が話され，次回のレベルが話される。ここに通わせる子供の親たちも含め，スリランカの親たちの多くは自分の子供の教育に対して熱心である。

・General Englishコース

General Englishコースは、下記の９つのコースからなっている。１６歳以上で授業料さえ払えば，受けることができる。どのレベルから学習を始めるかについては、入学前のテストで教師たちによって振り分けられる。

・　Pre Intermediate　１～３
・　Intermediate　１～３
・　Upper Intermediate　１～３

１回のタームの中で英作文，プレゼンテーション，英文法等の課題があり，その他に平常点や普段の発音が採点され，100点満点の60点で次のレベルに進級することができる。私が通っていたクラスでは、ほとんどが75点以上で80点以上とっている子供もたくさんいた。

２，British Councilで英語を学ぶ生徒の目的と意識

今回、Pre Intermediate３の午前の部と夜の部の生徒それぞれ20名，Upper Intermediate１の夜の部の生徒20名，ビジネスコースの20名（計80名）対象にアンケートをとった。アンケートの項目については、下記の通りである。
①年齢 ②性別 ③職業 ④学校名 ⑤会社名 ⑥保護者の職業　⑦British Councilで学ぶ目的 ⑧British Councilで学ぶ期間（予定を含む）⑨給料（ビジネスコースのみ）

アンケートには，ほとんどの生徒が英会話を上達させたいからとか，英語の知識を向上させたいという答えであった。この答えでは，生徒たちの本音の部分がわからないと考え，何人かにインタビューをしてみた。その結果，下記のようなことがわかった。

・　現地にもよい英語の教師はいるが，母国語を英語としている British Council の教師はやはり正しい発音で教えてくれる。
・　シンハラ語で日常会話している生徒は，英語を話す機会が多いために，会話を得意としている生徒が多い。しかし，気が付かずに誤った文法で話していることがあり，文法を勉強したい。
・　近々英語圏へ留学したいと考えているので，学習している。

・ スリランカ人の教師は厳しいのでイギリス人の教師の方がいい。
・ 仏教の布教のために２年後に外国へ行くから勉強している。（僧侶）
・ 各レベルの修了書が，就職するときに有利なので，ほしい。

というような答えが返ってきた。一番多かったのは正しい発音で会話をしたいという意見であった。

答えの中で，正しい文法を学習したいという生徒がいたが，現地では小学校３年生から英語教育が始まっているにもかかわらず，文法を身につけていない子が多いことを考えると，現地の英語教育についてもっと詳しく調べてみる必要があると思った。しかし，今回はこの点について，時間不足のために調査をしていない。

また，スリランカの教師は厳しいという指摘があったが，クラスの生徒たちやインタビューしたほとんどの生徒たちが言っていたが，現地の学校の教師たちの多くは鞭を持って教壇に立っているようである。生徒たちのことを叩くと言っていた。日本やイギリスでは教師が生徒を叩くことは違法なことだということを教えてあげると大変驚いていた。よくみんなの言うことを聞いていると，スリランカの教師たちは，道徳的なことにとても厳しく，反道徳的な行いをしたと判断したときに体罰するようである。

British Councilで英会話の勉強をしている僧侶もいる。これは，海外に仏教の布教に行かせるために仏教会の方から奨学金が出ているようである。話を聞いた僧侶も２年後にマレーシアに行くと言っていた。

アンケートを見たり話を聞いたりしているところ，午前中に勉強している生徒と夜の部で勉強している生徒では，British Councilで学習する意識に違いがあるようである。午前の部の生徒たちは，全体的に短期間でやめる生徒の割合が高かった。この時間帯で学んでいる生徒は大学生と主婦が多いのであるが，中には何もしていない無職の人たちもいる。この人たちは，短期間で修了書をもらい，就職のときに有利にしようという生徒が多いようである。また，自分の子供に小さいときから英語を学ばせ，自分も負けないように勉強を再び始めた母親などもいた。

夜の部には様々な人たちが通っている。私のようにスリランカに住んでいて，英語を勉強しようとしている外国籍の人たちや昼間学校に通っている高校生，大学生，インター校の生徒と会社員である。純粋に勉強したいという生徒が多く，熱心に勉強している。

男性と女性の割合であるが，３対１で男性の方が多いが，女性も熱心に勉強している。その中で，こちらの学校制度では男女別学であるので，British Councilに通っている高校生の中には異性の友達と一緒に勉強することが楽しいので通っているようなことを言っている生徒が，ごく少数いた。

３，ビジネスコースの生徒について

他のコースの生徒たちと比べると女性の割合が高く半数が女性である。また，アンケートによると年齢は１９歳から４４歳までいたが，二・三十代の生徒がほとんどであった。生徒の職種については，経済や会計の勉強をしている学生や一般の会社員そして都市開発公社に勤めているＯＬと様々であった。このコースでは，ビジネスに使う専門用語や書類の書き方，ビジネスに必要な知識等を勉強する。生徒のみんなは自分の英語の知識や会話力を引き上げるためにとても熱心に勉強しているが，仕事の合間をぬって勉強していることと授業料が高いことがあり１・２回のタームでやめるのがほとんどである。

・終わりに

アンケートの中に保護者の職業や生徒の給料を尋ねる項目を求めたのは，British Councilの授業料がスリランカの感覚ではとても高いからである。スリランカの平均的月給は6000ルピー（１ルピー＝1.09円）と言われている。また，アンケートからビジネスコースに通っている会社員の月給もほとんどの生徒が15000ルピー以下の給料であることがわかった。その中でBritish Councilの授業料が１ターム15200ルピー，Young Learnersコースで半額（毎回200～300ルピーずつ値上がりしている）ということを考えると，ビジネスコースの人達が長い間通えないこともわかる。また，子供たちを長い間British Councilに通わせることができる家庭は，現地ではとても裕福な階層の人達であることもわかる。

それほど高い授業料でもBritish Councilに通うメリットは何であるか考えてみた。自分の英語力の向上のために子供たちは勉強はしているのであるが，親にとってのメリットは何なのであろう。医者や会社の役員クラスの親たちは将来に留学させて勉強させようと思っているようである。また，午前の部の生徒たちが言うように修了書が就職に有利なためなのかもしれない。

その後，コロンボ近郊にあるケラニヤ大学で仏教学を２０年以上教えている遠藤教授からきいたところによると，大学には能力のある学生がたくさんいるのであるが，能力があっても英語を話すことのできない学生には就職口がごく少ないと言うことであった。現地語であるシンハラ語だけであれば，自分が学んだことを活かした就職口がないというのである。そのようなことにならないように，できる限り子供のうちから英語になじませたり，高い授業料を払ってBritish Councilで勉強させたりしているようである。スリランカで仕事をしていく上で，英語は必要不可欠ということであろう。

今回の調査を通して，現地の高校生や学生の本音を聞くことができ，大変興味深く聞くことができた。また，世界の共通語の一つである英語を話すことができるようになる必要性も改めて感じた。

今，日本でも英語活動を取り入れた総合的な学習の時間の実践が行われているが，今後日本でもより英語による表現力を向上させる実践が必要となってくると思われる。